

平成 30 年 5 月 31 日現在

機関番号：13301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16896

研究課題名(和文)トルコ絨毯の産地における文化社会的価値と品質の相関—手工芸の持続的発展に向けて

研究課題名(英文)Towards Sustainable Development of Handicraft: Correlation of Socio-cultural Value and Quality of Turkish Carpets in the Production Areas

研究代表者

田村 うらら (TAMURA, Ulara)

金沢大学・人間科学系・准教授

研究者番号：10580350

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究期間の2年目(2016年)に、テロやクーデター未遂等、調査対象国の急激な治安不安定化に伴い、途中で調査国および研究内容の変更を迫られたため、研究成果としてはやや拡散した。変更前の主たる成果としては、通称DOBAGと呼ばれる、トルコ絨毯復興プロジェクト実施地の2000年代以降の衰退過程と現況を詳細に把握したことである。また、変更後の主たる成果は、トルコと言語的・民族的共通性が高く、絨毯の伝統を誇る隣国アゼルバイジャンの絨毯生産・流通の現状を多層的に把握したことである。また、国家の絨毯文化・産業への強い関与が、絨毯のアート化・遺産化を主導している過程を明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：Due to the sudden destabilization of Turkey in the 2nd year (2016) of this research period, the research plan was forced to be changed both in the survey country and in the research content. It leads to the consequence that the research results were diffused and have two different focal points. The main result before the change was to grasp the process of decline of carpet production since the 2000s and the current situation of the Turkish carpet revitalization project known as DOBAG. The main result after the change is that in the neighboring country Azerbaijan, which has much in common in its linguistic / ethnic cultural background with Turkey, I investigated the current situation of carpet production and distribution in multiple layers. In addition, I clarified the process concerning the strong involvement of the nation in the carpet culture and industry that lead the artisticization and heritagization of their carpets.

研究分野：人類学

キーワード：手工芸 人類学 トルコ 絨毯 生産・流通・消費 グローバル化 価値

1. 研究開始当初の背景

世界各地に多数存在する伝統的とされる手工芸品について、その技術的・美的価値はもとより、それを作り使う人びとの営みのなかで醸成されてきた文化的価値の重要性が認められていることは、論を俟たない。各地の手工芸品の製作技術や伝統的利用をめぐる文化的総体が、文化遺産として保護の対象になってきている現況は、そのひとつの際立った表れといえる。

布(絨毯も布に含まれる)をはじめとする伝統的手工芸品をめぐる状況について、これまで人類学者たちは、世界各地の豊かな民族誌的事実の緻密な分析を通して明らかにしてきた。特に文化社会的側面について **Weiner and Schneider eds.(1989)**、経済人類学的な分析では **Little and McAnany eds.(2011)**の二つの論文集が、その代表格である。個別の研究としては、特定の手工芸品を生産する社会において、そのローカルな生産と利用が、親族・地縁や継続的顧客関係などの多様な社会関係を基盤として成立していることに議論の重点をもつものもあれば【**田口(2003)** **金谷(2007)**など】、近代化を経験しつつも、手工芸品が日常生活のみならず儀礼などの象徴的場面において多用されたり、民族集団・階層などを表象する役割を担いつづけていることに力点を置くものもある【**太田(1997)** **上羽(2006)**など】。また、それら当該社会がグローバルな市場経済に与するなかで、生産(原材料や生産工程・生産組織など)や利用の側面が受けたさまざまな変化にも注意が向けられてきた【**中谷(2003)** **松井(2012)** **田村(2013)**など】。

他方、世界各地で手工芸品の生産は、伝統文化保護あるいは農村/観光開発や女性の経済的自立支援といった目的のもと、さまざまな外発的プロジェクトの傘下に収められてきた。トルコ絨毯についても、トルコ国内の経済的な後進地域で女性を雇用する絨毯工房や、天然染料による伝統的な染色技法を復興し農村女性の経済的自立を促すプロジェクト **DOBAG** の存在がよく知られている。こうした取り組みについては、開発やジェンダーの視点から分析が行なわれてきた【**Hart(2009)**、**Isik(2008)**】。しかし、そのプロジェクトに参加することによる経済的変化や政治的状況についての分析に偏っており、各々の生産活動の、作り手たち自身の文化社会における位置づけについてはほとんど顧みられることがなかった。この傾向は、トルコ絨毯に限らず、各地の民族手工芸生産にも共通する。問題は、前出の人類学的な研究との間に大きな乖離が見られることである。本研究はこの両者を、広い意味での「品質」維持システムを鍵に架橋する位置を占める。それは、互いの利点欠点を活かしてよりサステイナブルな小規模手工芸生産のありかたを模索する契機となり得る。

2. 研究の目的

本研究は、トルコ絨毯を事例として、グローバル市場経済に与する伝統的手工芸品の産地における生産活動を流通・消費との繋がりの中で踏まえたうえで、それら手工芸品の各産地における文化社会的役割と技術的過程について明らかにし、それらが品質といかに相関するのかを検討するものである。経済的な動機づけや効果ばかりが意識されがちな手工芸振興のさまざまな取組みを、作り手たちの属するローカルな文化社会的文脈と手工芸品の品質維持システムとの関係において捉え直すことをとおして、伝統的手工芸が市場の変動の激しさに疲弊せずに存続する要因を整理して提示する。将来的には、各地の伝統的手工芸の、より持続的な発展を促す仕組みづくりへの寄与を目指す。

3. 研究の方法

本研究で用いる研究方法は、フィールドワーク、現地資料の精査、人類学と社会学および地域研究等隣接分野の文献精読の三本柱である。

初年度と翌年度を中心に、トルコ国内の絨毯生産地における集中的なフィールドワークを行なうと同時に、政府統計局や、文化観光庁、地方自治体、博物館、各種図書館等から、統計資料・行政レポート・地誌・書籍・カタログ等を適宜収集するとともに、精査を行なう。文献精読においては、物質文化研究(「モノ研究」)や消費社会論、伝統文化論、(手工芸)開発に関わる人類学・社会学的研究に関連する文献の精読を行なう。

※以上が、当初の計画上の方法である。初年度終盤から2年目にかけて、度重なるテロやクーデター未遂等による混乱トルコ共和国内での治安の急激な悪化により、当初のフィールドワークの計画を大幅に変更せざるを得なくなった。そこで、同様に絨毯文化の伝統のあるテュルク系民族の国家である隣国アゼルバイジャン共和国に現地調査先を変更した。

4. 研究成果

全体的には、計画外の事態に現実的に対処したことが功を奏し、トルコにおける絨毯の価値や政策を類似の他国と対照的に捉えたり、現代的な文脈から捉えるなど、新たな視点を獲得することができ、非常に有意義であったと考える。ただし、中途での調査国・内容の変更により、研究内容と収集したデータが拡散してしまい、結果的にはすぐには出版に耐えうるだけの十分なデータと分析結果を研究期間内に揃えることは不可能であった。そのため、研究期間内の成果発表としては、当初の計画よりはやや乏しい結果となった。

2年目からの大きな方向転換のため、ここでは全体の成果を総合的に述べるのではなく、以下研究計画変更前(1年目)と変更後

(2・3年目)に行なった調査・分析とそれぞれの成果の概要について記述する。

(変更前：1年目)

初年度にあたる平成27年度は、夏期に従前の調査国であるトルコ共和国のマニサ県およびムーラ県において、合計40日余りに及ぶ現地調査および資料収集を実施するとともに、英語論文の執筆・投稿を行なった。

現地調査期間の前半には、80年代から伝統天然染色の手織り絨毯復興プロジェクト DOBAG の拠点となったマニサ郡 Orselli 村に通い、関係者への聞き取り調査および観察を行なった。それにより、同プロジェクトの推移やこれまでほとんど報告されていない2000年代以降の現況を把握した。具体的には、1) 同プロジェクトは同様な他プロジェクトに比べ30年以上という破格の持続性をもっていること、2) 品質基準の一定化と保証システム、販路開拓の上で一定の成功を果たしていること、3) しかし2000年ごろからいずれの実施村でもキーパーソンの老化・引退を機に生産者側の意欲低下による担い手と生産量減退を経験していること、4) さらに Orselli 村では、近郊地での工業団地拡張と労働者通勤バスの独自整備により、女性の賃労働への流出が著しく、3の状況に拍車をかけており、絨毯織りを担うのは乳幼児育児中・療養中の在宅者に限られていること、である。

現地調査後半には、主に報告者の従前の調査地であるミラス地方のミラス市および周辺村落部において、絨毯生産・流通・消費に関わる人類学的調査を行なった。その結果、数年前に比して、工業製糸の白糸の生産中止や若年女性の観光業への若干の進出等、生産活動をめぐる環境変化が起こりつつあること、ミラス絨毯が地元において徐々に「保護・展示されるべき遺産」になりつつあることが認められた。さらに加えて、ムーラ大学の大学教員でミラス絨毯研究者であるベルナ・セヴィンチ氏とミラス絨毯の生産・流通と保護の現況や今後の研究協力・プロジェクト展開の可能性について意見交換も行うことができた。

研究成果発信の点では、査読付き英文ジャーナルに、トルコ絨毯の伝統的産地村落部にグローバル経済が及ぼした影響とその「ローカル化」の様相についての論文を執筆・投稿し、受理された。さらに、日本文化人類学会の北陸地区例会等においても研究発表を行ない人類学者たちと議論を交わした。

(変更後2・3年目)

上述の通り、現地治安状況の悪化により現地調査先をトルコからアゼルバイジャンに変更にせざるを得なかった。この調査地変更に伴い、2年目以降は、研究内容も絨毯の「文化遺産化」や「ファッション化」といったより現代的な現象についてのグローバルな枠組みとの関連に焦点化するという現実的な

対応を取った。アゼルバイジャンはトルコと言語的・民族的共通点が多く、イランと並んでその絨毯文化がユネスコの世界無形文化財として登録されているなど、絨毯の伝統を誇る国家である。とはいえ、報告者にとって初めて渡航した既存の人脈のない国であり、観光ビザでのごく短い滞在期間内での現地調査とその後のデータの分析には困難も伴った。このような制約のなかでも、本研究費を受けて、3年目(2017年度)にアゼルバイジャン絨毯に関する国家主導の大型国際シンポジウムに参加するなど1週間の現地調査を行った。(なお、2年目にあたる2016年度には、別科研を受けて分担者として同国で10日間程度の現地調査を実施した。実際には把握事項を切り分けることは困難であるため、以下はその調査により得られた知見と合わせた結果である。)

その結果、主に以下のような点が明らかになった。1) 現在アゼルバイジャンでは、工房における女性の賃労働による絨毯生産が非常に盛んであること、2) 各地の工房では、ソビエト時代にカタログ化された各地の特徴ある文様とともに、写實的・芸術的絵画から方眼紙に起こされた模様様の絨毯が、イランからの輸入の工業製糸を用いて盛んに生産されていること、3) 絨毯は学術的文脈で美術に位置づけられており、絨毯模様様の開発は美術学部で養成される「画家」が担っていること、4) 国家が積極的に絨毯文化の育成・広報・産業化・芸術化・遺産化に関与していること、5) 以上の国家と絨毯の関係に加え、シーア派であることや社会主義の経験も、アゼルバイジャンの絨毯の現況に濃密な影響を与えていること、6) 村落民間レベルでの絨毯生産については、統計上も不明な点が多く、実情はほとんど廃れていると考えられることの6点である。

さらに、2年目の後半には、トルコの外からトルコ絨毯の現代的価値について追求する一策として、手織り絨毯のグローバルな流通において非常に重要な役割を果たしている、ドイツの国際見本市 DOMOTEX(ハノーヴァー)と港湾都市絨毯商(ハンブルク)の現地調査を遂行した。この調査により、手織り絨毯という伝統的手工芸のグローバル流通現場の激しい変化と、マーケティングの最先端の一端を仔細に記録することができた。なお、この調査で得られたデータは、過去に行なったトルコ国内での調査データと合わせることで、トルコ絨毯の「ファッション化」というグローバル化現象についての論文として英語出版される予定である。

以上の通り、3年計画の2年目に大きな内容変更を迫られたことで、当初の研究目的に適った、方向性の一貫した成果を順当に発表することは困難であった。それは、1年目にトルコで収集した未完の調査データと、2・3年目に状況に柔軟に対処しながら新たな

調査地で得られた知見に、乖離があったためである。しかしながら、絨毯（文化）と国家の関係、遺産化の問題、ファッション化というグローバル消費の観点など、類似国との対比からトルコ絨毯の現状をより広い視野から捉えられたことは、未だ形にはならないが研究上の大きな成果であると考えている。これらの視点を援用しながら、すでに発表・出版の確約が研究期間内に得られた成果発信に向けて、引き続き尽力する所存である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

- ① 田村うらら 「トルコのイスラーム礼拝用絨毯」月刊『みんぱく』490巻 2018年、pp. 7-8、査読無し
- ② 田村うらら 「トルコの「嫁入り道具」の今昔をひも解く」『季刊民族学』164巻 2018年、pp. 79-88、査読無し
- ③ Ulara Tamura “Our Carpet: Transformation from Global Commodity to Local Tradition” in Journal of the International Center for Cultural Resource Studies, 1, 2015, 査読有り

〔学会発表〕（計4件）

- ① Ulara TAMURA “Trading Days: An Examination of Labor Exchange in Turkish Carpet Weaving Villages” The International Workshop on “Debt: 5000 Years and Counting” by David Graeber (国際学会), 2018
- ② 田村うらら 「トルコ南部の遊牧民ユルックの現在: 生業を巡る変化を中心に」生態人類学会第23回研究大会、2018年
- ③ Ulara TAMURA “Local Handicrafts Culture and Market Economy: a Suggestion from a Case Study of Turkish Carpet Production” International Symposium on Cultural Resource Studies 2016 “Design and Diversity” (招待講演) (国際学会), 2016
- ④ 田村うらら 「トルコ絨毯を通して考える、グローバル化時代の『伝統的』手工芸」日本文化人類学会北陸地区研究懇談会第134回例会、2015年

〔図書〕（計1件）

- ① Ulara TAMURA, “Patchworking the tradition: The trends of fashionable carpets from Turkey” in Fashionable Traditions (全15章のうち1章を単独担当), Lexington Books, 2019年、ページ未定

〔その他〕

ホームページ: Ulara Tamura - Anthropologist

<http://ularatamura.com>

金沢大学研究者情報

<http://ridb.kanazawa-u.ac.jp/public/>

（金沢大学研究者情報のページは、上記 URL にアクセスの後、田村うららと入力してサイト内検索すると、個人の研究教育内容詳細ページに進むことができる。）

6. 研究組織 (1) 研究代表者

田村うらら (TAMURA Ulara)

金沢大学・人間科学系・准教授

研究者番号: 10580350

(2) 研究分担者: 単独で行なう研究課題につき、なし。

(3) 連携研究者研究分担者: 単独で行なう研究課題につき、なし。

(4) 研究協力者: 特になし